

詩篇 68 篇

指揮者のために。ダビデの賛歌。歌

【第一部】

- 1 神よ。立ち上がってください。神の敵は、散りうせよ。神を憎む者どもは御前から逃げ去れ。
- 2 煙が追い払われるように彼らを追い払ってください。悪者どもは火の前で溶け去るろうのように、神の御前から滅びうせよ。
- 3 しかし、正しい者たちは喜び、神の御前で、こおどりせよ。喜びをもって楽しめ。
- 4 神に向かって歌い、御名をほめ歌え。雲に乗って来られる方のために道を備えよ。その御名は、主。その御前で、こおどりして喜べ。
- 5 みなしごの父、やもめのさばき人は聖なる住まいにおられる神。
- 6 神は孤独な者を家に住まわせ、捕らわれ人を導き出して栄えさせられる。しかし、頑迷な者だけは、焦げつく地に住む。
- 7 神よ。あなたが御民に先立って出て行かれ、荒れ地を進み行かれたとき、セラ
- 8 地は揺れ動き、天もまた神の御前に雨を降らせ、シナイもイスラエルの神であられる神の御前で震えました。
- 9 神よ。あなたは豊かな雨を注ぎ、疲れきったあなたのゆずりの地をしっかりと立てられました。
- 10 あなたの群れはその地に住みました。神よ。あなたは、いつくしみによって悩む者のために備えをされました。
- 11 主はみことばを賜る。良いおとずれを告げる女たちは大きな群れをなしている。
- 12 万軍の王たちは逃げ去り、また逃げ去る。そして家に居残っている女が獲物を分ける。
- 13 あなたがたは羊のおりの間に横たわるとき、銀でおおわれた、鳩の翼。その羽はきらめく黄金でおおわれている。
- 14 全能者が王たちをかしこで散らされたとき、ツアルモンには雪が降っていた。
- 15 神の山はバシャンの山。峰々の連なる山はバシャンの山。
- 16 峰々の連なる山々。なぜ、おまえたちは神がその住まいとして望まれたあの山を、ねたみ見るのか。まことに、主はとこしえに住まわれる。
- 17 神のいくさ車は幾千万と数知れず、主がその中に、おられる。シナイが聖の中にあるように。
- 18 あなたは、いと高き所に上り、捕らわれた者をとりこにし、人々から、みつぎを受けられました。頑迷な者どもからさえも。神であられる主が、そこに住まわれるために。

【第二部】

19 ほむべきかな。日々、私たちのために、重荷をになわれる主。私たちの救いであられる神。
セラ

20 神は私たちにとって救いの神。死を免れるのは、私の主、神による。

21 神は必ず敵の頭を打ち碎かれる。おのれの罪過のうちを歩む者の毛深い脳天を。

22 主は仰せられた。「わたしはバシヤンから彼らを連れ帰る。わたしは海の底から連れ帰る。

23 それは、あなたが、足を血に染めて、彼らを打ち碎くために。あなたの犬の舌が敵からその分け前を得るために。」

24 神よ。人々は、あなたの行列を見ました。聖所でわが王わが神の行列を。

25 歌う者が先に立ち、楽人があとになり、その間にタンバリンを鳴らしておとめらが行く。

26 「相つどうて、神をほめたたえよ。イスラエルの泉から出た者よ。主をほめたたえよ。」

27 そこには、彼らを導く末子のベニヤミンがおり、その群れの中にはユダの君主たち、ゼブルンの君主たち、ナフタリの君主たちもいる。

28 神よ。御力を奮い起こしてください。私たちのために、事を行われた神よ。御力を示してください。

29 エルサレムにあるあなたの宮のために、王たちは、あなたに贈り物を持って来ましょう。

30 葦の中の獣、それに、国々の民の子牛とともにいる雄牛の群れを、叱ってください。銀の品々を踏み汚す戦いを喜ぶ、国々の民を散らしてください。

31 使節らはエジプトから来、クシュはその手を神に向かって急いで差し伸ばす。

32 この世の王国よ。神に向かって歌え。主に、ほめ歌を歌え。セラ

33 昔から、いと高き天に乗っておられる方に向かい、ほめ歌を歌え。聞け。神は御声を発せられる。力強い声を。

34 神の力を認めよ。みいつはイスラエルの上に、御力は雲の上にある。

35 神よ。あなたはご自身の聖なる所におられ、恐れられる方です。イスラエルの神こそ力と勢いとを御民にお与えになる方です。ほむべきかな。神。

読んでのとおり、本篇は 35 節までである長篇です。しかも、内容的に一貫したテーマを読み取ることは困難であり、類型に当てはめることのできない、注解者泣かせの詩篇とも言われています。ですが、できる限り構成立て、本篇の理解に努めたいと思います。

第一部（1-18 節）

①はじめの賛美（1-6 節）

②イスラエルを導かれた神（7-18 節）

第二部（19-35 節）

③イスラエルを担う神（19-31 節）

④おわりの賛美（32-35 節）

①はじめの賛美（1-6 節）

まず、1-4 節では「正しい者」と「神の敵」の決定的な扱いの違いが呈示されています。「正しい者」には、神の御前で「こおどりせよ」「喜びをもって楽しめ」「歌え」「道を備えよ」と勧められます。この情景は、ダビデが「契約の箱」の前で喜び踊り狂った姿を思い起こさせるでしょう（Ⅱサムエル 6:12-14）。それに対し「神の敵」には、「散りうせよ」「逃げ去れ」「滅びうせよ」と真逆の宣告がなされています。「神を憎む者」という表現は十戒の第二戒「汝、偶像をつくるなかれ」の中に出てきます。つまり、神様にとってご自身を憎む者とは、神以外のものを神格化することを指すのでしょうか。その道を突き進む者が、神と共にいられなくなるのは必然のことです。

5-6 節では、神がどのようなお方であるかが明らかにされています。「みなしご」「やもめ」「孤独な者」「捕らわれ人」を顧み給うお方であると言われています。人間の世にあって、もはや助けを得られなくなった人々も、この方によって守られ解放されるということです。

②イスラエルを導かれた神（7-18 節）

この部分は更に三つに分けることができます。

- (1) 荒野を導かれた神（7-10 節）
- (2) 散らされた王たち（11-14 節）
- (3) 選ばれたシオンの山（15-18 節）

7-10 節では、イスラエルがエジプトでの奴隷生活から解放されてから、荒野の放浪の旅を経てカナン之地に入ってしまった出来事が思い起こされています。神はどんなときにも民の先頭に立ち、荒野を導いて行かれました（7 節）。そして、シナイ山で十戒と律法が与えられ（8 節）、ついに約束の地に入って行きました（10 節）。

11-14 節では、カナン之地に入ってから先住民との戦いについて言及されています。ヨシュアをリーダーとして、イスラエルは諸民族と戦い、数多くの勝利を収めました。13 節の「銀」「金」とは、退却したカナン人の軍隊が残っていた高価な品々を指すでしょう。「鳩の翼」（13 節）が何を意味するのかは不明ですが、戦利品の一つと解釈できそうです。

15-18 節には、「バシャンの山」をはじめとし、「峰々の連なる山々」といった、立派な山脈の名称が出てきます。それに対し、エルサレム神殿が立つ「シオンの丘」（いと高き所／18 節）は低く貧相だが、神は特別な恩恵をもってそれに目を留めておられるということが言われています。「なぜこんなに小さな丘が顧みられるのか」と、他の山々が妬みを燃やすという面白い表現になっています（16 節）。これは結局、イスラエルという小さな民族を特別に愛しておられる神の愛を表現しているのです。

さて、ここから第二部に入ります。

③イスラエルを担う神（19-31 節）

この部分も更に三つに分けられます。

- (1) 敵の手からの解放（19-23 節）
- (2) 勝利の行進（24-27 節）
- (3) 諸民族の敬意（28-31 節）

19-23 節で特に心に響いてくる言葉があります。それは「日々、私たちのために、重荷をになわれる主」（19 節）という表現です。ここで思い起こす聖句があります。

ヤコブの家よ、わたしに聞け。イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。（イザヤ 46:3-4）

これは、本篇全体を貫いているテーマと言ってもよいでしょう。イスラエルを常に担い、導いてこられた見えない神の存在が明らかにされています。この方は、度重なるイスラエルの背信によっても彼らを捨てず、罪を赦し続けてくださいました（死を免れる／20 節）。「バシャン」（22 節）とは非常に高い山、「海の底」（22 節）とは非常に深い所。イスラエルのために戦われる神は、敵をどこまでも追いかけ、打ち破られるということが言われているのでしょ

24-27 節では、勝利を得てくださった神に付き従って行進していく民のパレードの様子が描かれています。「聖所」（24 節）とはエルサレム神殿の最も神聖な場所であり、そこに向かってゾロゾロと「歌う者」「楽人」「おとめら」（25 節）が行進を続けます。この描写は、人生を終えた信仰者たちが神の許へと凱旋する姿と重なります。27 節には「ベニヤミン」「ユダ」「ゼブルン」「ナフタリ」という、イスラエル十二部族の中の 4 つの部族名が出てきます。ベニヤミンとユダは南の代表、ゼブルンとナフタリは北の代表。これらが十二部族を代表し、全体を表しているのです。ヨハネの黙示録 7:5-8 にもイスラエル十二部族の名前が出てきますが、これらは救われた神の民全体を表す表現です。

28-31 節には、異邦の国々の王がイスラエルの神に贈り物を携えてくる描写が出てきます（29 節）。「葦の中の獣」（30 節）とは、ナイル川に住むワニやカバを指しますが、これらはイスラエルを抑圧し続けたエジプトを指す言葉でした。「子牛」「雄牛」（30 節）という表現もエジプト王とその家来たちを表します。つまり、かつて神の民を迫害した国々も、やがて主なる神様の御前に平伏す日が来ることを預言しているのです。主イエスが誕生されたとき、東方の博士たちが贈り物を携えてやってきた出来事や（マタイ 2 章）、世の終わりに「天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が『イエス・キリストは主です』と告白して、父なる神に栄光を帰する」（ピリピ 2:10-11）と言われている聖句が次々と思い起こされます。つまり、本篇の壮大なビジョンは世界宣教であり、イスラエルの祝福が全地に及んでいくことを予表しているのです。

④おわりの賛美（32-35 節）

以上の流れに乗って、最後には賛美がイスラエルだけのものではなく、全世界のものとなって終わります。当初は「神の敵」が滅びうせるようにという厳しい宣告で始まった詩篇でしたが、おわりには世界中の民を抱き込んだ賛美が大胆に求められています。

詩篇 68 篇全体を流れる一つのテーマは、小さきイスラエルの民を常に担っておられる神の姿でした。私たちの人生も同じ方によって担われ、ここまで歩んできたことを思い起こしましょう。神は途中で私たちを投げ出すお方ではなく、常に共にまし、罪を赦し、御許に引き寄せてくださいます。世の終わりの勝利の凱旋の列に加えられた者として、力強く歩んでいきたいと思います。